

〈です・ます体〉の文章は軽いか？

時事通信が鴻上尚史さんの原稿を拒否した理由

加藤 良一 令和5年1月15日

鴻上尚史 こうかみしやうじ さんが時事通信社から、成人の日に向けて依頼された原稿の書き方が問題とされて、話しあったものの折り合いがつかず、ついには発表できなかったという事態が発生しました。

鴻上さんは、劇作家・演出家ですが、NHK-BSのテレビ番組「COOL JAPAN〜発掘！カッコいいニッポン〜」のキャスターとしても活躍しているユニークな方です。この番組は、「日本人には気づかない日本文化の魅力を再発見！」と題し、外国人から見た日本の社会を取り上げて紹介しています。

 **鴻上尚史**：劇作家・演出家。早稲田大学法学部卒業。高校時代から演劇部に所属。当時は文化部同士の連帯には共産主義のイメージが蔓延していたために、また共産主義者の集会に参加していたこともあり、県教育委員会よりコンクールに参加できないという経験をした。大学では早稲田大学演劇研究会に所属していた。

鴻上さんは、世に出なかった原稿を敢えてTwitterに公表しました。時事通信が付けた注文とはいったいどのようなことだったのでしょうか。鴻上さんによれば「体言止めが美しい」などと20か所以上も指摘が入り、書き直すことに納得できず時事通信と決裂したといえます。

<鴻上尚史さんの **Twitter** コメント> 1月6日 @KOKAMIShoji

時事通信から、「成人の日によせて」という原稿の依頼が来て書いたのですが、書いた文章に20か所以上の直しが入りました。「体言止めが美しい」というような理由で、納得できないと申し入れたら決裂しました。せっかく書いた文章なので、ここに載せます。多くの若者に届きますように 🙏

成人の日によせて

成人、おめでとう。でも、「大人になる」とはどういうことでしょうか？

僕は、親や先生や先輩や友達の意見にただ従うのではなく、「あなた自身の頭で考えること」だと思っています。自分の人生を自分で決めるということです。

けれど、これはとても難しいことです。だって、日本の若者達はずっと「自分の頭で考えるな」という訓練を受けてきたからです。

日本の多くの中学校や高校では「中学生らしい」「高校生らしい」服装や髪形にしようと言われていきます。けれど、「高校生」というイメージは、様々です。それぞれの人の頭には、それぞれのイメージがあります。それを「高校生らしい」という一言でまとめるということは、「考えるな」ということです。

リボンの幅が3センチは「高校生らしい」が4センチになると「高校生らしくない」ということを論理的に説得できる大人はいないと思います。

僕は愛媛県出身ですが、「愛媛県人らしい服装をして下さい」と言われたら、絶句すると思います。あなたも「出身の都道府県人らしい格好をして欲しい」と言われたら混乱するでしょう。

それと同じくらい「高校生らしい服装」というのは定義不能なのです。

「服装の乱れは心の乱れ」という日本中でくり返される標語がありますが、大人に気付かれないように巧妙にいじめる奴らの服装は乱れているのでしょうか。陰湿な奴ほど、ちゃんとした服装をしていじめることをみんな知っています。

黙ってブラック校則に従え、疑問を持つなと教えられて来たのに、成人する時にいきなり「自分の頭で考える人になって下さい」と言われるのです。ずっと「一人で泳ぐな!」と言われてきたのに、成人したらいきなり「一人で泳げ!」と言われるようなものです。それは無理です。僕は、日本の若者に深く同情します。

が、嘆いてもしょうがないです。自分の頭で考える訓練を始めるしかありません。そのためには、本を読んで下さい。僕達は、国語の授業でずっと「退屈な本ほど価値がある」と思い込まされてきました。でも、ワクワクドキドキしながら、本当面白く、あなたの生き方の役に立つ本が間違いなくあります。本屋さんに行って、面白そうに感じた本の最初の1ページをとりあえず読んで下さい。つまらなければ、すぐに次の本に移ります。それでいいのです。何十冊とくり返すうちに、あなたにぴったりの本がきっと見つかります。読書は作者との対話であり、あなたの考えを深めます。やがて、「自分の頭で考えること」が身につくようになるのです。さあ、成人して、やっとあなたは自分の頭で考えていい世界に来たのです!

鴻上尚史

読んで頂ければおわかりのように、この文章は〈です・ます体〉で書かれています。この文体というものがじつは大いに問題なのです。鴻上さんは「体言止めが美しい」と時事通信から注文を付けられ、20カ所以上の直しが入ったとしか述べていません。内容は若者への応援ですから、注文を付けようがなく、問題は書き方にあったと思われます。

〈である体〉と〈です・ます体〉

私が思うには、おそらく時事通信は〈である体〉で書き直すよう要求したのではないのでしょうか。「体言止め」とは、主に名詞や代名詞で文章を切ることですが、果たしてどの部分を指しているのか、見当はつくもののこれだとはわかりません。

「体言止め」は文章のリズムを変えたり、文章を簡潔にする効果があります。例えば、次のような文章が考えられますが、これは良いとばかりはいえず、逆にそっけなさや粗雑な感じを受ける人もあるかもしれません。

今日は晴れて風もなく絶好のテニス日よりです。今から出かけます。

ㄴ 今日は晴れて風もなく絶好のテニス日より。今から出かけます。

そこで、鴻上さんの上の文章を仮に〈です・ます体〉に書き直すとしたら、優に30カ所を超すのではないかと思います。試しに冒頭を書き直してみます。

成人おめでとう。でも、「大人になる」はどういうことでしょうか？

↳ 成人おめでとう。しかし、「大人になる」はどういうことだろうか？

僕は、親や先生や先輩や友達の意見にただ従うのではなく、「あなた自身の頭で考えること」だと思っています。自分の人生を自分で決めるということです。

↳ 僕は、親や先生や先輩や友達の意見にただ従うのではなく、「あなた自身の頭で考えること」だと思っ**て**いる。自分の人生を自分で決めるということ**である**。

場合によっては、「僕」→「私」、「あなた」→「きみ」に変えよなどというかもしれません。

時事通信は、いわゆる「格調の高い」文、それはとりもなおさず「やや固い」文がほしいということかもしれません。一般に「論文」と名の付くような文章は〈である体〉で書かれるのが常識(!)ですが、その理由についてはこれまでほとんど触れられずにきました。しかし、そこへ一石を投げたのが哲学者平尾昌宏さんの近著「日本語からの哲学 なぜ〈です・ます〉で論文を書いてはならないのか?」です。この著書は、文体について極めて根本的なことを考察していますが、まだ読みこなしていないので、あらためて別の機会に書きます。

私が〈です・ます体〉か〈である体〉のどちらを選ぶかは、書く内容や、その時の気分で決めましたし、実際に科学系の雑誌に論文を発表したときは、まちがいに〈である体〉でした。〈です・ます体〉を選ぶことなど想定したこともありませんでした。

鴻上さんが貫いた主張がどういうことだったのか、大いに関心があります。〈です・ます体〉と〈である体〉ではまったく世界が異なるからです。

以上、鴻上さんの文を私なりに解釈してみました。みなさんはどのように受け取られるでしょうか。

Back

「ことば／文芸」TOP へ戻る

Home

「ホームページ」表紙へ戻る